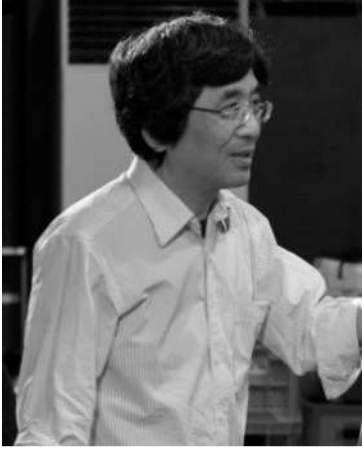


◆◆◆ コメント ◆◆◆

[演出] 鶴山仁



1945年、広島「紙屋町さくらホテル」で「一億玉砕」という途方もない夢の呪縛から逃れ、大日本帝国の延命よりも、一人の日系二世の自由を優先しようとした人たち。彼らの原動力は、一体何だったのか。本土決戦か降伏かという選択を迫られるギリギリの状況下で、不要不急のはずの「芝居」が、もしかしたら何かの役に立ったのだろうか。

芝居には、現実世界に居ながらにして、現実とは別の、もう一つの人生観、世界観を生きるというふらちな特性がある。この特性が地球を独占しようとする人類の狂気から、また「国家」という厄介者の振りかざす大義名分の罨から、少しでもわれわれを解き放つ力になればいいのだが。

五年ぶりの再演。新型コロナとロシアによるウクライナ侵略とに挟み撃ちにされた2022年。これは「芝居の役割」をもう一度問い直す、貴重な機会かもしれない。

神宮淳子 : 七瀬なつみ



コロナ禍を経験し、当たり前前の日常は当たり前ではないということに気付かされました。大切な人と会い、楽しい時間を過ごすこと。したいことを思いっきりすること。お芝居の初日が開いて千秋楽を迎えること……。

かつては当たり前だったはずのそれらすべてが、今は奇跡にさえ思えてしまいます。

このお芝居の初日が開ける頃にはすっかり過去のことになっていて欲しいですが、まだ難しいでしょうか……。

大好きな作品『紙屋町さくらホテル』に再び参加できる喜びは、もう言葉になりません。

終戦間近の広島で、この作品の登場人物は、明日どうなるか分からない不安な日々の中、小さな幸せを見つけながら前向きに生きています。あの時代を精一杯生き抜いた人々のことを思いながら、再び“神宮淳子さん”を演らせて頂きます。

終戦して75年以上経ちましたが、今あらためて上演することで、戦争の悲劇と、そこにたくましく生きていた人々がいたことを、今一度思い出していただくきっかけになればと思います。また、この作品は、私がお芝居をやる時の支えになっている大切な作品でもあります。

“ひとりではできないことをしている”そのことを噛み締めながら、劇場で再び皆さまとお会いできることを楽しみにしております。

丸山定夫 : 高橋和也



『紙屋町さくらホテル』は僕にとって初めての長い旅公演でした。一座の皆さんと助け合い、励まし合い公演を続けました。会場も一つ一つ違って舞台装置もその都度微妙に変わったり、大きさも違うので声のボリュームを調整するのに苦労した思い出があります。福岡公演の時でした。もうだいぶやってきて、慣れもあったのでしょうか。僕は舞台の上で絶句してしまったのです。

ほんの一瞬の事でした。「今日は調子がいいな、いつもと少し芝居を変えてみようか？」等と一瞬考えた次の瞬間、自分の台詞が全く出てこなくなったのです。相手役は松角洋平君でした。僕は絶句したまま舞台の上を熊のように歩き回り、必死に次の台詞を思い出そうとしました。僅か30秒程だったでしょうか。僕には永遠に感じられました。井上先生の台詞は独特のリズムと言いつつ回り、俳優に余計なことをさせないように台本が完璧に出来上がっているのです。この芝居をやる度に井上先生がそこに居てこっちを覗いている気がします。

園井恵子 : 松岡依都美



私がまだ文学座の準座員だった2006年、初めてこの作品と出会いました。

心の底から感動し、その後しばらく“すみれの花咲く頃”を口ずさみ、いつか絶対『紙屋町さくらホテル』に出演するんだと、私の俳優人生の目標の一つと心に決めたあの日から10年後、2016年遂にその夢が叶いました。初演当時はとにかく無我夢中。その後2017年に再演。長い旅を続けていくうちに、本当にさくら隊になっていくような感覚を覚えています。正直いいですとその時、たとえ今後私がこの作品に参加出来なくても、絶対にこの作品は上演し続けて欲しい、やり続けるべきだと強く願っていました。

それくらい私にとっても、今というこの時代にとっても意味のある大切な作品だと感じていたからです。

あれから5年がたち、まさかまたあの愛おしい登場人物達と再び出逢うことができ、紙屋町の世界に飛び込めるなんて夢のようで、心から嬉しくて、それと同時に身の引き締まる思いでいっぱいです。

今回は少しメンバーも変わり、また新たな『紙屋町さくらホテル』になることへの期待で胸が踊ります。そして、“演劇の子カラ”を信じて、魂込めて、愛を込めて、全身全霊で演りきりたいと思います。

戸倉八郎 : 松角洋平



さくら隊、再び

待ちに待った舞台、しかも『紙屋町さくらホテル』。再再演が決まった瞬間から待ち遠しくて仕方がなかった。体内の細胞がピチピチと喜んでいることが自覚できるほど、この作品は自分にとって大切なものである。

私は長崎生まれ、広島の隣、山口で育った。祖父母が原爆で被害を受けた方々を必死に看病した話を聞いたことがある。今も爪痕の残る街中の風景も、心に傷を残す方も知っている。そして、何よりその土地の人々があまり過去を振り返らず底抜けに明るく前進している温度を感じている。きっと作品が、井上さんが、私を選んでくれたのだと信じている。

この作品に登場する人物は不安な時代をそれぞれに使命を受け、必死に生きています。生きようとしている。各々目標は違えど、熱量は等しく美しく燃えている。その圧倒的な熱量が我々演者にも求められる。「戦争反対」と口で言うのは我々の仕事ではない。この作品を観終えた観客の口からその言葉が強く発せられるよう稽古に励む所存である。

敵は初演、再演の己にあり。